
君に伝えたかった言葉

縷縷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に伝えたかった言葉

【Zコード】

N2185Y

【作者名】

縷縷

【あらすじ】

人を誰でも敵にまわして
人を信じられなくなってしまった1人の男の話

・・・・・

ありがとう

俺の中の辞書には無かつた言葉を言わせて
くれた君。

こんな言葉言える口がくるなんて
思つてもいなかつた。

人を殺してでもいいと思ってた俺が・・
君に出会えて本当に良かつた。

ありがとう・・

ありがとうございました。

そしてこれからも見守つてください。

2 - (1) 姉ちゃん

俺には6歳年上のお姉ちゃんがいた。

その姉ちゃんは小学校の時一生懸命勉強して中高一貫の学校に入学した。

姉ちゃんはいつもにこにこして
優しくて・・そんな姉ちゃんが俺が10歳の時、
突然死んだ。

事故死だつたとのこと。下校途中にトラックにはねられたらしく。
俺は突然すぎて何がなんだか分からなくて
お通夜のときも終始つたつたままだつた。

すごい事故だつたらしくお通夜には警察官とトラックの運転手と
学校の先生達もきた。
でもなぜか姉ちゃんの同級生の子たちは誰もいなかつた。

俺のほんやりとした意識の中聞こえたのは警察と運転手と教師の声。

「佐藤南海さんほどのような状態だつたのでしょうか。」

「あの子が急に飛び出してきたんだ！…びっくりしてブレーキを踏
んだけど
間に合わなかつたんだ。」

トライックの運転手は悔しそうに下をむいた。

「そんなわけない！！南海さんは注意深い人だつたんです。言い訳してゐんじやないんですか。」

姉ちゃんの担任らしい人が運転手に向かつてそう言った。

「違ひ。本當だ！！そつちに学校でいじめとかあつてたんじやねーのかよ。」

「や、そんなことはない！……とても仲のよいクラスだつたんだ。」

どうして人間はこんなにも自分を守る事しかできないのだろう。

姉ちゃんが死んだのを惜しまずにはじめにいたが罪の擦り付け合いをしていく。

「、ふざけんじゃねえ。

俺は気づいたら運転手と担任につかみかかっていた。姉ちゃんは俺のたつた1人の兄弟だったのに。なんでもしてくれたのに。どうしてお姉ちゃんだったんだ。世の中には死んでもいいようなクズがいるだろ。ここにいる一人みたいに。

「 さけんじゃねえ。俺はお前等をぜつて一許さねえ。」

二人は抵抗もせず黙つて俺に殴られ続けた。

警官1人がとめに入つたが俺は乱暴をやめなかつた。

「 君、やめなさい！！そんな事してもお姉さんは生き返るわけじゃないんだぞ。」

警察にそういうわれ俺は落ち着きを取り戻した。思いつきり拳を握つた。

「 姉ちゃんの事は俺が本当の事をつきとめる。絶対に。人を殺しても。」

俺はそこへその場をたつた。

俺はそれからしばらく学校にいかななかつた。家にいてずっと勉強していた。

それは姉ちゃんの通つてた学校に入学するため。

「レン……あなたも姉ちゃんの学校に行くの？」

ある日の晩俺はお母さんにそうこわれた。

「ああ……もう決めたから。」

「いや……絶対駄目。無理よ。」

お母さんは俺の腕を思いつきついつかんだ。

「何で? ……お、姉ちゃんの生きてた時通つてた学校だから
もしも行くとなつたとき辛いから?」

俺はまだ俺より背の高いお母さんを見つめながらうつむいた。

「やつじやなくて、あんたがあんなにボコボコした
先生が前いた所なんだから行くと変な目で見られるわで
とっても恥しいじゃない! ……!」

俺はお母さんのその言葉に思わず目を見開いた。

「あんな奴殺したつていいくらいなんだ! ……あれだけですんだ
ならいい方だよ。」

お母さんの手を振りほどいて近くにあった本をお母さんの顔面に掛け
けて

投げ俺は一階の自分の部屋まで走つていった。

お母さんまであんな事をいうなんて思わなかつた。

姉ちゃんが死んで悲しいのは俺だけなのかよ。

そういうえばおかしいよ。クラスの友達だって来てくれてなかつた。

担任の奴はいじめという言葉をあせりながら否定したし・・・。

もうすぐ11歳になるという夏、俺は人が信じられなくなつた。

3 - (1) 入学式

姉ちゃんが死んでから今日で丁度2年。
ニュースにまた報道されて辛さを蘇えさせられた。

「2年前、東京都横浜市でトラックにはねられ・・・」
俺はすぐにチャンネルをかえた。

そこにはカメラに目を向き放心状態で立っている
2年前の俺の姿があつたからだ。

テレビはさつきの生々しいニュースからバラエティ番組へと
切り替わった。

「君かわういいねー。
さんきゅうでいいす。ちゃらめがねー。」
そこには20代の一人の男が写っていた。
金髪で黒縁の伊達メガネをかけていていかにも
“チャラい”男だった。

「俺もこんな格好をすれば何もかも忘れられて
明るく生きられるのかな。」
俺はTVを前に一人でそう呟いた。

それから俺は中学生になる前の春休み
髪を金髪にし耳に穴をあけてピアスをつけた。

その後しばらくして
姉ちゃんの通つてた星月太陽学校から
“合格おめでとうございます”のハガキが届いた。

入学式当田3時間前、俺はまだダラダラしていた。

あれ以来親ともあまり口を聞かなくなつた。
だから入学式にも来ないとと思う。

そして俺は新入生代表の挨拶をしなければならない。
面倒臭いが言わなければならぬ事があるから。

俺は金髪の髪をワックスでセッティングピースをつけて
リビングに向かつた。

リビングには味噌汁とご飯がラップしておいてあり
その下の紙にこれを食べてから行きなさいと
書いてあつた。

「つまつ。

誰もいないリビングでお箸を持ち替えたがらそつと書いた。

TVに目をむけるとその隣に綺麗にアイロンしてある
学校の制服がハンガーにかかっていた。

学校の制服は上はカッターとネクタイ下はチェックの
七分丈ぐらいのズボン。

俺はシャツを出したまま制服を着て
近くにおいてあつたスポーツバッグをからつて家を出た。

指定の黒い靴があるがそんなの知ったことじゃない。
俺は構わず自分の靴を履いて行つた。

少し予定より早く出てしまつたけどクラス表をみて
担任の所に行くつもりだから丁度良い。

自転車で風を切つて俺は猛スピードで学校へ向かつた。

学校に着いて俺は今クラス表掲示板の前にいる。

俺のクラスはB組で担任はどうやら女のようにだった。

玄関から入つて校舎ないへと足を踏み入れた。

結構新しい作りでめちゃくちゃ広くて綺麗な所だった。

「米永米永。」

俺は担任の名前を唱えながら担任を探していた。

この広い校舎だから探すのに30分以上かかった。

向こうからは米永がこちらに向かっていて
丁度話しやすい位置だった。

俺はすれ違う寸前で米永に向かつて言った。

「米永：B組。俺等の担任だろ。」

米永はびっくりして振り返った。

「え、そ、そうだけど。何その金髪頭……ふざけないで。」

俺はふふっと笑つてやつた。

「安心して、あんたが今思つたよつてこの6年間の学校生活
楽しいものにはさせないから。」

米永は俺の腕をがしつと掴んだ。

「ちょっと校長室に来なさい！…」

米永がそう言つたから俺はポケットからカッターを出した。

「校長室に用はない。俺が用あるのはテメえだけだ。」

大きい声で言い過ぎたのか。遠くから一人の男が走ってきた。

「あんた何やつてんだ！――！」

校長だった。

「そ、そなんですよ。困るんですよこの生徒。」

米永はあせり顔でそう言った。

「ちょっとこっちに来なさい。」

校長が引つ張つていったのは米永の方だった。

「やつぱりな。」

俺と姉ちゃんの存在を知つてることこの先生は俺に恐れてる。

姉ちゃんの事を言わされて星月太陽学校の名に傷がつかないようにな。

俺は自分の教室B組へと向かつて いた。

図書室の前を通り過ぎ音楽室の横の階段を登つた所に

1 - Bと書かれた札がかけてあつた。

俺は勢い良くドアを開けた。

がらつ

その音とともに俺は皆からの視線を感じた。

まだ人になれない生徒達。皆が席に座つて本を読んだりしている。

でも俺が教室に入つてきた瞬間それは変わつた。本を読んでいた人は手をとめ前後の子たちと何やら話しあじめ教室は一揆に騒がしくなつた。

俺は自分の出席番号通りの席へとつかつかと進んでいった。

カバンを机の上に乱暴においたせいで隣の席の寝ていた女子が目を覚ましてしまつた。

「びっくりしたあ。」

顔の整つた綺麗な顔をした女の子だつた。

普通はここで謝るべきなのだろうけど俺は前をむいたまま黙つていた。

「隣の席なんだよ。よろしく。」

その女は金髪に対し驚きもせず俺を見つめながらそう言った。

「ああ。」

俺が無愛想に返すとその女はあかるく元気な声で

「あたしの名前は佐藤玲羅そつちは？？」

と尋ねて来た。

「佐藤蓮」

俺がそういうと玲羅は一瞬驚いたような顔をしたがすぐに元通りの顔に戻った。

そして前を向くと急いで携帯をとりだしてメールを打ち始めた。

変な奴。

最初はそんな風にしか思っていなかつた。

数分立つと教室に担任が入つて來た。

「入学式がはじまるからその出席番号順に廊下に並びなさい……。」
先生は一人ずつの背中を押しながらそう言つた。

俺が廊下に出る寸前で先生は手をとめ俺と目を合わせた。
「佐藤あんた代表の挨拶するんでしょ？？」

俺は視線だけで

「ああ」とうなずいた。米永はそれを理解したようで俺の背中を押しながら

「頑張んなさい。」とだけ言つた。

体育館の前にA組B組C組D組の順番で並んだ。

外から体育館の声はもれていなかつた。

中に入るとしんとした体育館からいっぺんして大きな拍手に包まれた。

B組が体育館に入ると俺を見た2年生の一人の男が指差してきた。
俺は軽く睨みすぐに前を向いた。

俺をみると皆ざわざわしだす。でも俺はそれに動じない。

だつて俺は勉強や将来の為にこの学校に入ったわけではないから
別にダラダラしてようが関係なかつたから。

綺麗に並べられた椅子に俺はどかづ、と腰をおろした。

「静かにしてください。入学式がはじめられません。」

女の会長らしき人が2・3年生にそう言つた。

「では、入学式をはじめます。氣をつけ」

会長がそういうと2・3年生は一斉に立ち上がつた。

1年生はおおおおしながらも先輩達につらるるよう立ち上がつた。

「礼。」

後ろを見るととても綺麗なお辞儀だった。

俺も誰かのせいで人生を狂わされなかつたらああいうのに感動して2年になつたら先輩として1年に格好良い所を見せてやううと思つていたのかもしれない。

「佐藤蓮くん。」

微かに横から声がした。ゆつくり首を横に傾けると校長先生が手招きをしていた。

「何。」

とジエスチャーを送ると校長は

「もうすぐ代表の挨拶があるから裏ステージに行かなきや。」
と言つた。

俺は静かに立ち上がり皆の前を通りステージ裏へと向かつた。

「緊張せずにリラックスだよ。」

「余裕だから。」

俺は余裕の表情でそつと言つた。

ステージ裏から中を見るとわざの会長が一年生に向けて応援のメッセージを贈つてゐるようだった。

その会長がステージをおつるとすぐマイクを手に「次は新入生代表の挨拶です。」と言つた。

「蓮くん行つて来なさい。」

俺がステージの真ん中に行くと一瞬しん、と静まり返り一揆にざわざわした。

「静かにしてください。」

と会長が言つたけれどそういう会長も少し驚いている様子だった。

俺はマイクを持つて口を開いた。

「えつと先輩方、俺は優等生ぶりたくてこの学校に入ったわけではありません。」

俺がそういうとびからか、ふざけんな。とこう呟がした。

「この学校には恨みがあるんです。」

こんな学校今すぐでもぶつ潰してやる。」

俺は冷たくそう言つた。

俺のそんな態度に眞面目を立てているはずだが誰も何も言おつとはしなかつた。

一人の先生を除いては。

「あんたふざけるのもいい加減にしなさい！！」

それは米永だった。皆の視線は一揆に米永に集中する。

「ちょ、やめてください。」

横にいた校長が小さい声でそう言いながら米永をとめていた。

俺は米永の方にマイクを本気で投げつけた。

どさつ

マイクは米永の横の壁に大穴をつくった。

「調子乗つたこというと次は当てるますから。」

俺はにこつ、と笑つてみせた。

正直米永にキレたわけではなかつた。

本当は校長の学校の名を傷つけないようにしている態度にムカついたんだと思うけど米永にマイクを投げた。
もひこの頃から自分が何だかわからなくなつてしまつていた。

体育館を出る際、校長先生から

「放課後に校長室によりなさい。」

といわれた。

皆の前だからよそよそしい態度をせずには

俺に怒つた口調で言う校長に余計腹が立つた。

教室に戻つて出欠確認がされた。
俺の名前が来る前に俺は寝たふりをして名前を呼ばれたのに気づいていても無視をした。

俺の後ろの奴の名前が呼ばれた。

「篠田祐也」

返事がなかつた。

「篠田くん入学式なのに休み?」

米永が皆さんそう言つたがそんなこと誰も知らないから質問に答えようとすると生徒はいなかつた。

何日かたつたある日、俺はいつもどおり教室へ向かっていた。

教室に入つて席につくと何か違和感を感じた。すると後ろから寝息のよつた音が聞こえてきた。

後ろを向くとそこには知らない奴がうつ伏せになつて寝ていた。

髪は金髪を黒に染め直したような赤髪で風でふわふわとなびいていた。

「コイツもしかして篠田祐也??」

俺が疑問な顔で篠田を見つめていると玲羅が俺に話しかけてきた。

「その子祐也って子なんだけど、小学校ん時かなり荒れてたらしいから。まじ蓮みたいな感じじゃない?」

笑いながらそう言いやがった。

「あつそー。」

俺は興味なさそうに玲羅に言い放つた。

正直まじで興味ない。興味持つてる暇なんてないし。

俺は姉ちゃんの事件の手がかりを見つけるためにこの学校に来たんだし。

「何か荒れ放題だつたから小学校ん時の教師と母親が24時間勉強につつききりでこの真面目学校に送り込まれたつて噂。」

玲羅は微笑みながら言つてると後ろの祐也が

少し右に傾いた。

手にのせていた頭が落ちてまい田が覚めてしまったようだ。

「おお、寝てたのか。」

祐也は独り言のように呟いた。

俺と玲羅は何事もなかつたかのように黒板の方を向いた。

「つづか金髪じゃんつ。コロ金髪でもいいのかよ。」

祐也が俺の肩を思いつきり叩いた。

俺はうざそうに後ろを振り向いた。

「あーあ無理やり染め直されだし、あのままがよかつたのに。」

俺が無視をしたから一人でべらべらとしゃべりはじめた。

なんなんだよ「イツ。

祐也は髪が赤くて目は色素の薄い茶色で
顔立ちも結構よかつた。

今思つと今まで出会つたどの男よりも優しく
かつこよくなつたんじゃないだろうか。

「お前うつとうしいから。」

それだけいうと体を前に戻した。

「ちくえ。やっぱ俺の事みとめてくれる奴なんていねえよな。」

小さい声だったが微かに聞こえたその祐也の声。
少し寂しそうだった。

このころからだらうか。何か自分と似てゐると思い始めたのは。

昼休み俺はコンビニで買つてきたパンを一人で食べていた。
金髪にピアスに指定じゃない着方の制服に靴。
この格好でいると本当に楽だ。

誰も近づきたがらないし先生さえ文句一つ言わない。

・・・今日の前にいる「イツを除いては。

「飯食つてんの??俺と一緒に食おうぜー。」

祐也は俺の目の前の椅子に腰掛けた。

「一人つて寂しくね？お前だつたら誰とでも友達になれると思つのにな。」

祐也は下を向きながら言った。

「…

祐也は顔をあげ真っ直ぐ俺の目を見てきた。

「、負けた。

「別に寂しくねえよ。俺に友達とかそんな名前だけな奴必要ねえし。第一わざと近づきたがらないよつにしてるんだし。」

祐也が少し笑った。

「やつと普通にしゃべってくれたな。つか俺も友達何て必要ないと思ってる。誰も俺の事みとめてくれねえしさ。」

やっぱり朝も小声でそう言つたんだ。

「意味不明。」

俺は苦笑い気味にそう言つた。

「お前こそ何そんなひねくれてたんだよ。」

祐也は俺の髪の毛に触れながら口を動かした。

「俺は・・・・・。」

言いかけてやめた。信用してないし何より俺の存在を全否定されそうで怖かつたから。

「あ？ 何？」

祐也は気になるそぶりを見せた。

言つたら絶対ひかれらるだろうな。多分コイツも俺に近づきたがらなくなるだろ？

でも俺は一人の方が楽だし・・。

ひかれて俺から離れて行つてくれた方がいいのかもしれない。

「俺は、何で姉ちゃんが突然死んだのかの手がかりをつきとめるためにこの学校に来たんだ。

「この教師はいじめの事を聞かれた時あせつてたし、この学校の名に傷がつかないようにだとと思うけど。

姉ちゃんをひいたトラックの運転手は教師のせいとか姉ちゃんのせいとかにして、俺ん所の母さん何か俺がその時ボコつた先生がいるから姉ちゃんがこの学校にいたから行くとなつた時辛いから何か関係なしにこの学校に俺が行こうとしているときとめに入つたし。

本当意味わかんねえんだよ。俺の周りの人間は・・・。」

言つてしまつた。祐也の顔がみれない。もしかしたらいい気味だと

笑っているのかもしない。

「お前…大丈夫か？？」

突然出てきた祐也の言葉に驚いて俺はパッと頭を上げた。

「俺もそんな感じで傷つけられて人間何て信用できねえんだよ。」

祐也は泣いていた。自分の過去を思い出してなのかそれとも

俺の話を聞いてなのかはわからないが今、目の前にいる男は涙を流

している。

すると祐也も何やら話しを始めた。

「俺には小学校ん時彼女がいたんだ。小さくてどじで心配な奴でさ。ある日その彼女とソイツの女友達の数人が放課後の教室でしゃべってて。

その日彼女の誕生日だつたから一緒に帰るひつと思つて静かに教室の前で待つてたんだ。そしたら俺の名前が出てきて悪いとは思つたんだけど教室のドア越しに移動してその会話を聞いたんだ。

その会話聞かなきゃ良かつたんだよな。彼女俺の事おもちゃとしか思つてなかつたみたいなんだ。告白してきて優しくしてくれたから俺もじょじょに好きなつていて。

彼女がその時言つた言葉は、私の事好きになつてきてるみたい、まじバカ。

もうすぐ振るから。それを聞いた友達は爆笑してた。

彼女と友達が教室から出てきそうだつたから俺は今来たように装つて彼女の方へ歩いていった。帰りに彼女と一人きりになつたからさつきの会話の事

について本当かどうか聞いてしまつたんだ。そしたら彼女半泣きで、好きだから告白するつて

友達に言つたらその友達がすぐに別れるなら応援してあげるつて言

つたつて
言つてきたんだ。

俺は彼女を半信半疑だつたけど信じて今度はその友達に本当の事が
どうか聞いたら
ありえない。彼女の方がおとしいれてやる。つて言つたし。つて怒
鳴つて。

それから友達は集団で彼女をいじめはじめたんだ。俺は彼女の事が
本氣で好きだつたから
彼女と別れずにいじめから彼女を守つていた。

そしたらある日突然彼女と友達が仲直りしていく、今度は俺が彼女
と友達からストーカー
呼ばわりされるようになつて。

俺、親には捨てられた同然だつたから家には居場所何てなくて
学校でしか楽に暮らせなかつたのに。

そんな場所まで奪われてしまつたから、もう一人で生きるしかねえ
じゃん??

だからもう、どう人を信じてやればいいのかわからねえんだ。」

祐也は泣きながら言つた。

俺よりも祐也の方がよっぽどひどいかもしね。

こんな祐也の心の傷何処で、誰が癒してやれるんだろう。
きっと俺じゃ無理だ。自分の事で精一杯だし。

「蓮。俺の友達になつてくんね？俺もう一人とか辛いから。
この学校で変わらうと思つてたんだ。でもどうしたらいいか分かん
なくて

しばらく学校休んでた。明るくこればいいことに気づいたから

やっと学校にこれたんだ。」

わたくしの涙が嘘のように祐也は俺に笑顔を見せた。

「しょうがねえなあ。お前は信用してやるよ。」

不器用でそんな言い方しかできないけどここ数年の中でも一番最高の笑顔を祐也にみせた。

「ありがとな。よろしく蓮。」

「ああ、よろしく祐也。」

二人は最高の笑顔で握手をした。

「このパン1個いるか? 食えねえからまじ。」

「あ? いらん。実際の所飯一緒に食つ為にココ来たわけじゃねえし。ただ絡みに来ただけ。」

祐也は二カつと笑った。

「人がせっかくやるうつつってるのに。」

うぜえ。俺から物貰うなんて100年はやい。」

「お前がやるつていい始めただろ。意味不明ー。」

俺も二カつと笑つてやつた。

「そろそろ教室行くか。」

俺が立ち上ると祐也も続いて立ち上がった。

「そうだな。もう昼休みも終わりだな。」

この学校ではじめて信用できる友達ができた。
これからはもう一人じゃない。

眩しい太陽に目を細めながら俺たち二人はドアノブに手を伸ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185y/>

君に伝えたかった言葉

2011年11月17日21時38分発行